琉球・沖縄、ハワイ、グアムにおける言語接触と米国の言語政策

石原昌英

1. はじめに

本発表では、ハワイ、グアム及琉球・沖縄における英語と現地語の接触とその結果もたらされた言語状況について分析した。人が移動するということは、その人が話す言語も移動するということでもある。その人は移動先で、自分の言語とは異なる言語を母語（第一言語）とする人と出会うかもしれない。異なる言語を話す人々が出会うときに言語接触がおこる。二つの接触言語の一方が圧倒的な優勢言語となり、その話者が劣性言語となったもう一つの言語の使用を制限すると、劣性言語話者は様々な圧力により、次第に自らの言語を家庭においても使わなくなる。この段階で支配言語となった優勢言語は、社会的・経済的な成功をもたらすものとみなされるようになり、劣勢言語、言い換えると被支配言語を話していたであろう若者世代は、自らの本来の母語を否定的に見るようになり、それを継承しなくなる。その結果、言語交替が起こり、劣勢言語（被支配言語）は消滅の危機に瀕してしまうのである。

2. ハワイにおける言語接触と言語政策

ハワイの言語状況に大きな変化をもたらす契機となったのは 1820 年に米国北東部から宣教師一団が派遣されてきたことである。宣教師はハワイ語を学び、ハワイ語の表記法を確立した。これによりハワイ語の標準化が促進された。王国政府は 1840 年に公教育を開始したが、それ以前にも宣教師を教師とする学校があった。当初はハワイ語による教育が行われていたが、1840 年代前半から英語による教育が検討されていた。しかし、英語を教育言語とすることがハワイ人の子ども達に与える影響を懸念し、英語による教育に反対する議論もあったようである（Wist, 1940）。ハワイの経済界で英語の権威が高まっていたことと、上流階級の子ども達が英語による教育を受けていたこともあり、一般のハワイ人からも英語教育導入が要求されるようになった。

米国海兵隊の援護をうけた米国人の資本家を中心とした反乱により、ハワイ王国は 1893 年に滅亡した。翌 1894 年にハワイ共和国が樹立され、共和国は 1898 年の米国に併合された。共和国政府は 1896 年に教育言語に関する法律を制定し、全ての公立および私立の学校の教育言語を英語とすることを定めた。Silva (1989)は、ハワイ語が禁止され、子ども達はハワイ語を捨てることを強制されたと論じている。法律により英語が唯一の教育言語とされ、英語以外の言語が実質的に禁止されたことにより、英語はさらに優勢となり、ハワイ語は「禁止された言語」となったので、その将来が運命づけられたと言える。1898 年のハワイ併合で米国の準州になった以降も「English only」教育は継続された。

3. グアムにおける言語接触と言語政策

グアムは、1898 年の米西戦争終結後に当事国が締結したパリ条約に基づき、米国に領有された。1899 年には海軍政府が樹立され、米国のグアム統治が始まった。1900 年 1 月に一般命令（General Order）12 号が公布され、英語による公教育を導入されたが、英語に堪能なチャモロ人教員と教室が不足していたので、全ての対象者が学校で学べるということではなかった（Rogers 1995）。海軍政府の教育目的は、チャモロ人の英語化・米化（Americanization）であった。Rogers によると、1914 年までには公的な場では、英語が使われるようになっていたが、私的な場では主にチャモロ語が使われていた。1917 年に行政一般命令（Executive General Order）243 号が公布され、英語がグアムの唯一の公用語となり、公的な通訳を除いてチャモロ語の使用は禁止された。Underwood (1987)によると、学校で禁止されているチャモロ語を話した生徒は罰金を払ったり罰を受けたりしたので、精神的に傷ついたと考えられる。家庭でも英語を話すことが奨励され、英語を話せないと海軍関係の仕事を始め給料の高い職業に就くことができないことを理解した親の中には、次第に家庭でも英語を使うようになった者がいただろう。それでも、海軍政府が期待していたようには英語化・米化が進展していなかったのである。1940 年の国勢調査によれば、10 歳以上のグアム住民（そのほとんどがチャモロ人と考えられる）の約 75%が英語を話せたが、仕事以外の日常生活では、チャモロ語を話していた（Rogers 1995）。

1950 年 8 月 1 日に成立したグアム基本法（Guam Organic Act）により、グアムは自治属領（準州）とな

り、グアム住民は米国市民となった。当時の米国の状況から推察すると、米国市民となったグアム住民への米化の圧力がさらに強まり、英語の普及がさらに広まったと考えられる。1980 年の国政調査を分析した Underwood (1989)によると、経済成長と 1960 年代から続く、チャモロ人のグアム外への流出、グアム外からの外国人等の流入が、英語化の進展とチャモロ語の衰退の主要因であると述べている。2010 年の人口調査から、チャモロ語がグアムの少数言語であることは明白なので、英語化の進展とチャモロ語の衰退が 2000 年代になっても続いていたと言える。

4. 琉球・沖縄における言語接触と言語政策

米国は、1945 年の沖縄戦終結後から 1972 年 5 月まで約 27 年間にわたり沖縄を統治した。沖縄を日本から分離する思惑をもっていた米国は「琉球」という名称を用いた。1945 年に設立された軍政府は英語を普及させることの重要性を認識していたが、現地語である琉球語や琉球文化の教育に水をさすようなことがあってはならないと考えていた（Fisch, 1988）。沖縄側の要求もあり、米国統治下の沖縄では日本式の教育が実施されていたが、一部の小学校では英語も教えられていた（『琉球史料』（第３集　教育編）復刻版、1988 年）。1950 年の軍政府廃止後に設立された琉球列島米国民政府は、月刊誌『今日の琉球』を発行し、その一部に英語学習を奨励する記事を掲載した。例えば、1964 年 7 月号には、英語センターの開所式に出席したワーナー（Gerald Warner）民生官の挨拶が掲載され、英語の国際的な価値を認識したうえで英語を学ぶことは琉球の人々が経済的に豊かになる機会をもたらすと力説されている。

米国軍政府・民政府は、様々な方法で沖縄において英語を普及させようとしたが、沖縄側からの抵抗があった（石原 2017）。一方で、米国統治下の沖縄においては、日本のカリキュラムによる初等・中等教育が実施され、英語が他の教科に比べて重視されるということはなかった。ハワイやグアムでのように、英語を教育言語とし、琉球の言語や日本語を禁止するという教育言語政策は導入しなかった。米国軍政府・民政府は、沖縄人は日本人ではないという考えを持ってはいたが、沖縄人の米化（Americanization）は視野に入っていなかったようである。そのこともあり、米国の沖縄における英語教育政策は「中途半端」で終わってしまったと言える。ハワイやグアムにおける英語と現地語との接触と異なり、琉球における言語接触は英語が優勢言語となり、人々の日常言語になるという状況は生み出さなかった。このことは琉球の統治者であった米国の言語政策の結果である。

5.まとめ

ハワイ、グアム、琉球・沖縄における米国の言語接触と言語政策には類似点と相違点がある。まず、類似点であるが、現地語に比べて英語が優位であるという認識のもと、英語が経済的・社会的な成功と結びついていることを強調して、現地の人たちに英語の言語的価値を受け入れ、その習得に励むように奨励した。しかし、現地人の英語の受容と英語に対する言語態度・行動と米国の言語政策には共通するものはなかった

主要参考文献

Fisch, Arnold G. Jr. Military Government in the Ryukyu Islands 1945-1950, Center for Military History, United States Army, 1988.

石原昌英「米国軍政府・民政府の「世界語としての英語」普及プロパガンダ」、『言語文化研究紀要』第 25 号、2017 年、pp. 23-38.

Reinecke, John E. *Language and Dialect in Hawaii, A Sociolinguistic History to 1935*, University of Hawaii Press, 1969.

Rogers, Robert. F. *Destiny's Landfall. A History of Guam.* University of Hawai'i Press, 1995.

Silva, Kalena. "Hawaiian Chant: Dynamic Cultural Link or Atrophied Relic?" *Journal of the Polynesian Society*, vol. 98, no. 1, 1989, pp. 85-90.

Underwood, Robert. "Language Survival, the Ideology of English and Education in Guam," *Chamorro Language Issues and Research on Guam, A Book of Reading,* edited by Mary L. Spencer, University of Guam, 1987, pp.3-18.

_____"English and Chamorro on Guam," *World Englishes*, vol. 8, no. 1, 1989, pp. 73-82.

Wist, Benjamin O. *A Century of Public Education in Hawaii*, Hawaii Educational Review, 1940.